

自蹊庵便り

令和七年 皐月

NO 174

茶事折々 いざ対馬へ

その昔、今から五十年ほど前、三十代の頃に失明しかけたことがあり、そのときに覚悟したことは鉛筆一本と広告の裏紙があれば退屈しないで生きていけると思い、三十みそ一文字の世界をのぞくことにしました。そして萬葉集の中に防人の歌が百首近くあり、他の雅な調べとはちよつと違い、心惹かれたのが対馬という島を知った始まりです。

お蔭様で眼の方は半年のほどの赤外線治療でようやくことなきを得ましたが、それと共に料理人として徐々に活動の場も増え、三十一文字の世界も付かず離れず今に至っております。

料理人としての四十代、五十代、茶事一本に絞って出仕事屋になって今があります

が、茶の湯世界を覗けば覗くほど、対馬なくしては日本は語れず、茶の湯の世界も語れないのではないかと、十二年前、テレビに出るきっかけになった七十歳の茶事行脚の折しも、対馬に行きたいと心の隅で願っていたのですが、予算もスケジュールも無理があり、心の隅に温め続けてきたものです。

三年ほど前にその思いをふと、茶事にお見えになったお客様にお話ししたら、偶然対馬出身方で、念ずれば通ずるが如きここに、この夏対馬茶事の実現の運びにございます。

思わず、そして迷わず、鎮魂茶事というタイトルにしました。日本の防波堤のような存在の対馬、博多からは百キロもあるの

に韓国の釜山港からは五十キロ弱という距離にあり、それなのに日本国という不思議な歴史を担っている対馬。茶の湯の茶碗のほとんどが対馬なくしては語れない名腕達、太古の昔から距離の必然性から云っても切っても切れない朝鮮半島南部と北部九州、日本海岸地域などは一衣帯水の間柄かと思えます。

日本列島と朝鮮半島との相互の交渉、朝鮮半島からの渡来は必然であり、中国を語らずして日本は語れないと思っていた若い頃、今はそれ以前に日本に彩りを添えたのは、百済をはじめとする朝鮮であったかと、

朝鮮は中国の陸続きによるゆえに仏教も儒教や道教などの信仰、学問や芸術なども朝鮮の前手は中国であらうけれど、直々に流

伝したのは朝鮮であつたのでは：と年月を経てみると、朝鮮文化の史脈はとかく見逃されがちであつたように思うのです。

朝鮮の三国文化が、日本という島国の文化の花開いた光源となっていることは間違はなく、茶道具などの歴史においても、私の好きな佐波理とは鈍などを指す朝鮮語に由来すると云われておりますし、深掘りすればするほど隣国なくしては日本の島は語れませんね。

秀吉の無謀な朝鮮侵略がありながらも、歴史の絆は断たれることはなく、それほど深く切っても切れない縁えにしという史脈があるように思うのです。

二〇二一年に対馬・朝鮮通信使歴史館が出来たようですが、遅過ぎでは：と少なからず驚いています。

二百年にもおよぶ、朝鮮通信使の来日は江戸時代の日朝関係を多彩にしたばかりで

なく、日本と朝鮮の友好往来に画期的な成果をもたらし、少ないときでも三百名、多いときには五百名にものぼったよし、その使節団はほぼ幕末まで続いたとのこと。その間日本を他国から守った対馬つしま人の役目とご苦労は多大であつたように思いを馳せております。

冒頭に防人の歌のことに触れましたが、

防人は大陸からの攻撃を憂慮して九州沿岸の防衛のため設置された辺境防衛の兵で、任期は三年ですが、実際にはそう簡単には国には帰してもらえなかったようです。

帰路の費用も自分で負担、帰りたくても帰れない現実、無理して帰路についても途中で行き倒れる人達も少なくなかったようです。簡単には帰れないように、東国の人達が選ばれたそうです。命がけの単身赴任の歌、切ないですね。

防人歌は、当時防人を交代させる業務を担

当していた大伴家持が萬葉集に収めたものです。萬葉集の編纂者でも知られていますね。なお、八百年代には防人制度は廃止されています。

心に残っている歌二首載せておきます。

父母が頭かきなで 幸くあれと

言いし言葉ぜ 忘れかねつる

沖つ島鴨といふ 船の還り来ば

也良の防人 早く告こそ

齡八十二にしてようやく長年の夢かない今夏なつの八月七日から十日の三泊四日の行程にて、対馬での鎮魂茶事に 楽しみなことにございます。

我が願い ようやくかのふ 八十やその路

対馬に続けと 心みなぎる

櫻花の下にて 鶴女詠めり